

みちのく便り

富田満

第一報

雄大な岩手山に初冠雪、そしてその白い帯が、日いちにちと麓へと降りてくる、今日この頃です。朝晩の温度は、零下三、五度と、当地は十一月中旬にも拘らず、本格的な冬の訪れを迎えました。

東京で、氷点下に気温が下がる事は、二月にあるかないかぐらいです。持参した真冬用の衣類を全て着こみ、(ちゃっぷい、ちゃっぷい、どんとほしい!)と、眩きながら通勤しております。

こちらの方にとっては、これしきの寒さは序の口で、(富田さん、それでは盛岡の冬は、ダルマストーブ背負って、歩かねばならべなり)と、笑われる始末。

1994年十一月十七日

第二報

日中の気温が、零下に下がる事もなくな
り、やわらかな陽射しの中に、此の北国にも
春の訪れが近い事を、感じさせられます。(
と、いっても、最低気温は零下五〜六度。
体も漸く寒さになれてきたのか、零下二度
位の朝なら、(今日は暖かいなあ)と思う
ようになりました。しかし、一月の中旬に、
零下十四度の日が続き、小生が住んでいるマ
ンションの水道管も凍結、大騒ぎとなったの
には、さすがにまいりました。
冬、スキー>
スキー。車で一時間も走れば、安比高原・雫石
・岩手高原など、有名なスキー場いくつもあ
ります。
昔とつたなんとやらで、小生も学生以来久
しぶりにスキーをしてみました。その翌日は
、首筋やら腰やらそこらじゅうが痛く、体力

意味するそうです、長い冬を耐えしのんで	きた花達が、（春がきたじょく！）と一斉	に開花するのは、それはそれは美しいもので	す。	1995年五月二日	第四報	山々の木々は新緑に映え、当地では田植	えの季節が終わりました。東京の人間にとつ	て、田植えなど久しくお目にかかる機会がな	かっただけに、とても懐かしい人にあつたよ	うな気がしました。	コメの自由化が声高々に叫ばれています	少なくとも（日本の美しい風景の一つ）とし	て、この田園風景はいつまでも残すべきと思	います。	ここ盛岡でも国道沿いの郊外は、何処へ行	つても見られる、大型量販店などが建ち並び	、この無機質な町並みには、心の休まるとこ	ろがありません。
---------------------	---------------------	----------------------	----	-----------	-----	--------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------	--------------------	----------------------	----------------------	------	---------------------	----------------------	----------------------	----------

第六報

くさんさ祭り>

七月に入ると、夕暮れと共に、街角のあち
らこちから、太鼓の音が流れてきます。八

月二〜四日にかけて開催される、さんさ祭り
の太鼓の練習が、各企業・団体で競って行わ
れているからです。

さんさ祭りとは、太鼓・笛・踊り手で構成
される、百名以上の団体が、次々と中央通り
約一キロの道程を練り歩くわけで、年々参加

者は増加し、本年度は三日間で二万一千人と
の事。各地で、伝統芸能の継承に悩んでいる

中では、珍しい傾向と言えましょう。でも、
この祭りを見れば、その理由もおわかり戴け

る如く、太鼓の勇壮さと上品な踊りには、小
生も一度で魅了されてしまいました。

踊るアホに、踊らぬアホ、同じアホなら踊
らなきヤソンソンと、前支店長も老骨に鞭を

1995年6月6日

湯	し	と		出	で	り		<						た	も	て		う	る	情	打
治	た	い	大	か	、	で	当	温	第					。	っ	し	本	か	ゝ	熱	ち
場	。	う	変	け	小	、	地	泉	七						つ	年		と	の	の	参
的	彼	の	お	て	生	三	で	巡	報						て	度	感	ほ	ほ	加	
な	は	で	世	い	も	百	の	り							、	は	じ	と	と	し	
旅	、	、	話	ま	暇	〃	楽	>							北	た	た	ば	し	ま	
館	良	八	に	す	を	四	し								国	の	し	し	り	し	
に	家	幡	な	。	見	百	み								の	は	り	が	が	た	
お	の	平	っ		つ	円	は								、	小	あ	あ	っ	。	
泊	出	の	た		け	払	、								生	っ	っ	っ	こ	し	
め	身	藤	方		て	え	な								だ	こ	そ	そ	美	祭	
す	で	七	が		は	ば	ん								け	そ	美	し	り	は	
る	も	温	、		、	入	と								焉	美	い	い	は	。	
事	あ	泉	当		タ	浴	い								を	い	い	い	は	。	
に	る	に	地		オ	だ	っ								告	の	の	の	は	。	
躊	こ	お	に		ル	け	て								げ	で	で	の	。	。	
躇	と	連	来		を	で	も								た	し	し	。			
い	か	れ	ら		も	も	温								の	よ	よ	よ			
も	ら	し	れ		っ	可	泉								で	よ	よ				
あ	、	ま	る		て	能	巡								し	れ					

りましたが、紅葉のハイシーズンであったこと	ともあり、藤七温泉以外は何処も予約が、と	れませんでした。	彼は、生まれて初めて、木造りのお風呂に	入られてまず驚愕。また、部屋にテレビもな	いことから、帳場に碁盤を借りにいかれたよ	うでしたが、(そんなものはありません。)	つれない対応だったそうで、夕食をとった後	の時間をつぶすのに、大変苦労されていまし	た。今でもその方に逢うと、(富田君は、何	回もよく温泉につかれるよな!)と、笑いな	がら揶揄されます。	1995年9月10日			第九報	<宮沢賢治と石川啄木>	岩手県出身の著名な文学者といえ、両名	に加えて野村胡堂を、誰もがあげると思いま	す。	特に、啄木と賢治は共に二十六、三十七歳
-----------------------	----------------------	----------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-----------	------------	--	--	-----	-------------	--------------------	----------------------	----	---------------------

と、いう若さで急逝しているだけに、全国的にもファンが多い事と思えます。しかしながら、農学校教師や開拓事業を通して、地元と共に生きてきた賢治と比べ、借金を踏み倒し・女性癖も悪く、全国放浪の民であった啄木は、当地にてはあまり人気がないようです。来年は、賢治の生誕百年という事で、数々のイベントが組まれており、(風の又三郎)や、(銀河鉄道の夜)を読んで賢治ファンとなった読者が、全国各地から当地を、大挙して訪れそうです。

啄木の詩集(一握の砂)や(悲しき玩具)は、誰もが一度は読んでおきたいと思えますが、盛岡市中央通り三丁目に、啄木の新婚の家が保存されています。(やわらかに柳あおめる北上の岸辺に見ゆ泣けとごとくに)と、着任当初は北上川の土手を一人、物思いにふけりながら、よく散策したものでした。でも最近は一働けど働けどわが支店楽にならずじつと支店長と顔を見つめる)との心境であ

車のみならず、凍結した歩道での転倒事故	ます。	イレンの音が、一日中騒がしく鳴り響いてい	ます。(ピーポーポー)と、救急車のサイ	のスリップによる追突事故が、相次いで起き	日の日が続き道路は凍結状態で、街中では車	を(真冬日)と言います。一月に入ると真冬	夏日)というように、零度以上に上がらぬ日	日中の気温が、三十度を超える日を、(真	から、放射冷却が異常に強い為だそうです。	斜面且つ標高が六百八十メートルもあること	盛岡同様盆地を形成しており、北上山地の西	度の記録が残されています。これは、同地が	は昭和二十年一月二十六日に、氷点下三十五	ここ岩手県は本州一の寒冷地にて、藪川で	<本州一の寒冷地>	第十二報					1995年十一月二日	ります。
---------------------	-----	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	-----------	------	--	--	--	--	------------	------

も日常茶飯事で、お年寄りの捻挫・骨折もこの時期には増えます。一応スリッパ止めのついたブーツを冬季は着用しますが、ミラーのごとく表面がテカテカに光っている凍結道では全く効かず、なるべく足を上る時間を少なくして、そろそろと歩く以外の、転倒防止策はありません。

戸内外の温度差が三十度近くになる為、窓やドアは結露状態となり、これが夜間に凍ってしまいます。小生の住むマンションの鋼鉄製ドアも、朝の出勤時に開かず、体当たりして外へ出ます。飛び蹴り・ニードロップ・ブレーンバスターなど、小生の知る限りの荒業を駆使し脱出する姿は、（みちのくプロレスの、ザ・グレイト・サスケ）かとも言われています。

東京では冬季でも、タイツやズボン下（当地では何故か、下ズボンと言います）など着用した覚えのない小生ですが、さすがにこちらではお世話にならざるを得ません。女性陣

祭	耐	ち		と	為	神	冬	ぎ	溶						な	か	の	糸	ア	も
り	え	望		の	か	面	は	ま	け						り	？	○	の	ッ	も
で	忍	む		印	、	に	、	す	去						ま	全	○	パ	シ	か
そ	ん	気		象	東	与	当	。	り						し	て	ン	ン	シ	つ
の	で	持		が	北	え	地	十	、						た	が	ツ	。ソ	ョ	こ
頂	き	ち		強	の	る	の	一	街						。	な	を	。そ	ン	な
点	た	は		い	人	影	経	月	全							つ	は	う	。	ど
に	気	強		で	は	響	済	か	体							か	い	い		気
達	持	く		す	一	も	活	三	が							し	て	え		に
し	ち	、			般	少	動	月	冬							く	い	ば		せ
ま	を	木			的	な	の	ま	か							、	た	、		ず
す	外	々			に	く	み	で	ら							、	、	小		、
	に	の			口	あ	な	の	春								学			防
	向	芽			が	り	ら	約	へ							校				寒
	け	ぶ			重	ま	ず	半	と							時				第
	、	き			く	せ	、	年	衣							代				一
	そ	と			、	ん	。	に	替							の				の
	し	共			話	こ		亘	え							懂				着
	て	に			下	の		る	を							れ				膨
	夏	、			手	精		急	急							毛				れ
																				フ

1996年二月一日

第十四報

道路わきに積まれ、黒くすすけた雪の塊も

東京の春は、時間をかけてゆるやかにやっ	てきます。街角にちらほらと咲く梅、沈丁花	の甘い香りが漂う、ちよつと隠微な宵闇、そ	して風に舞い散る桜の花びら。これに対して	、北国の春は突然にそして一度に来るので、	それだけ季節の変わり目がはつきりとわかり	ます。人間は年をとると、人生の黄昏を感じ	る秋よりも、生命の誕生をそこかしこに、想	いをはせる事の出来る、春の方が好きになる	ようです。	1996年4月1日	第十五報	やわらかな陽射しが街中に拡散し、ここ北	国にもやつと待望の春が訪れました。	四十歳以上の人に「春をイメージする歌は	？」と聞くと、イルカの「なごり雪」だそう	です。「なごり雪」とは、都会人がつけた口	マンチツクな響きのある言葉ですが、こちら	ではこの「なごり雪」が、パート四十五以上
---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------	-------	-----------	------	---------------------	-------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	----------------------

にも及び、（もういいかげんにせい！）と、言う感じでした。三月末のある朝、出勤時のこと。（クワール・クワール）という、甲高い鳴き声にふと足を止め、空を見上げると、四十羽ほどの白鳥達が見事なV字編隊を組み、北の方角へ飛んでいくのです。北上川で冬を越した白鳥達の、感動的な旅立ちの姿であり、これからの五千キロにも及ぶ、長く辛い彼らの旅路に思いをはせ、（おーい、頑張れよ！そして冬になったら、また元気に戻っておいでー！）と、思わず声をかけてしまいました。日本サラリーマンが、（今度生まれ変わったら、何になりたいか？）との質問に対し、一番多かったのが（鳥）だそうです。考えてみれば、吾々は会社でも家庭などでも、籠の中に閉じ込められた、飛ぶことの出来ない鳥のようです。それ故に、物の見方も近視的・平面的になりがちで、俯瞰的な自由を得て、大空を飛び回る事の出来る（鳥）に、誰も

が潜在的な憧れを持っているのかもしれない
ん。

1996年5月1日

第十七報

(目に青葉、やまほととぎす、初鱈)新緑
が目にしみる季節となり、田植えを終えたば
かりの田園風景と相俟って、五月末から六月
上旬にかけてが、秋の紅葉の季節と共に、東
北の趣を堪能出来る、時期と言えましょう。
盛岡の初夏の風物詩といえ、(チャグチ
ヤグ馬コ)。毎年六月十五日、滝沢村の蒼前神
社から、盛岡市の盛岡八幡宮までの十五キロ
を、派手な衣装と鈴をつけた馬約百頭が、大
行進します。馬の首に。大きめの鳴り輪を吊
るすので、歩を進めるたび(チャグチヤグ
)と鳴ることから、(チャグチヤグ馬コ)と
呼ばれるようになった由。

最近発表された、環境庁の(日本の音風景
百選)に、水沢駅の南部風鈴、大船渡基石海

催	が	の							う	本	て	マ	現	な		京	リ	る	季	ま	岸
さ	ら	掛							か	語	カ	ー	代	ど		で	ン	（	節	し	の
れ	の	け							？	は	タ	デ	に	夏	団	は	、	ミ	を	た	雷
ま	さ	声								一	カ	ッ	お	を	扇	も	、	ー	感	。人	岩
し	ん	と								体	ナ	キ	い	表	、	は	、	ン	じ	間	と
ま	さ	共								、	に	チ	て	す	や	聞	、	、	る	は	共
した	祭	に								何	と	ェ	は	季	聞	く	事	ミ	事	視	、
。今	りが	、太								処	つ	エ	ク	語	事	が	出	ー	が	覚	こ
年	が	鼓の							1	に	て	ア	ー	が	が	来	た	ン	出	の	の
は日	八	音を						9		消	し	、	ラ	い	な	わ	、	、	み	み	音
程	一	を街						9		え	ま	、	、	つ	け	け	、	、	な	な	が
が日	日	中に						6		て	っ	あ	タ	か	で	、	夏	ら	ら	岩	
一	く	響か						年		しま	た	の	ン	あ	、	を	代	ず	ず	手	
日	四	かせ						七		った	だ	で	ク	美	し	代	表	、	、	県	
増	日	な						月		の	し	い	ト	い	日	表	す	に	聴	か	
や	ま							一		ので	っ	日	、	全	よ	す	も	て	覚	ら	
さ	で							日		でし	ト	サ	が	な	よ	た		も	に	選	
れ	開									よ	、		、	ど	、	し		、	も	ば	
た										う	全			な	、	。東	、	、	、	れ	
											日										

事もあって、過去最高の延べ百三十五団体、
三万四千人が参加したそうです。周囲を揺る
がす太鼓のリズムが、男の野性を呼び戻すの
か、この音を聞くと何故か小生の血が騒ぎ出
すのです。
祭りが明けた翌日、街中はいつもの静寂を
取り戻し、何事もなかったごとく、日常性に
回帰します。そして、みちのくの短い夏はさ
んさ祭りと共に終わり、風や雲の流れにそこ
はかたなく秋の気配が漂い始め、山々の木々
は衣替えの準備に入ります。
く インターネットに見る岩手県人像 >
岩手日報では、創刊百二十周年を記念し、
インタビューネットによる岩手県人のイメージ調
査を行いました。岩手県をよく知らない人々
は、当然イメージ先行型とならざるを得ず、
高村光太郎の詩（岩手の人 沈深牛の如し）
に見られるごとく、感情の表現の乏しさから
くる、解り難さ、消極的、閉鎖性などをあげ

たそうです。二年半の当地在勤を通じて得た
 小生の感想を有体に言わしてもらえば、相対
 的肯定面として（真面目で、性格がとてもい
 い人）が多いという事であり、否定的な面と
 して（保守的且つ積極性の欠如）という事に
 なるでしょうか。
 岩手県人が此れまで育んてきた、（良き岩
 手らしさ）も、中央と地方の境界を取り外す
 、情報化社会の中で、希薄化し且つ消えつつ
 あるようにも思えます。良き岩手県人気質の
 風化と地域性の喪失が、本当に岩手県人と
 って幸せなのかどうか、疑問なしとしません
 。都市部との経済格差が縮小し、文化・流行
 を同時期に共有出来る喜びを、決して否定す
 るのではありませんが、都市部の人間と同様
 な画一的な精神構造を、保有するようになつ
 ては欲しくないと、岩手県を愛する一人とし
 て思う次第です。

1996年九月一日

(ぬけるような青空)との表現がありま

す。秋になると本当に空が高く感じられ、重

く頭を垂れた稲穂の中に、さわさわと風の通

り道があります。街道筋にはコスモスの花が

咲き乱れ、深まる秋に彩りをそえており、誰

しもがなにかを思う、憂愁の季節となりました

た。

酒を酌み交わしながら、(人間にとって幸

せとは何か?)と議論することもあり、その

後は必ず(青い鳥)を求めて、夜の巷を徘徊

するのであります。(また、来てね!)と送

り出された街角で、(ああ、人生五十年!)

と敦盛を口ずさみ、遙か夜空を見上げれば、

遙かかなたに聞こゆ、銀河鉄道の汽笛。

<

岩手県の水産物>

さんまが美味しい季節となりました。当地

に来て初めて、さんまの刺身を食べる機会が

あり、料理の鉄人岸記者の感想ではありませ

んが、その美味に（大変おいしゅうございま
す。）といたく感激。それ以来、小生にと
って秋の訪れは、さんまの刺身と共にやっ
くる次第。
東北の水産物珍味といえはホヤ。外観から
海のパイナップルと言われており、その味は
筆舌し難く一度味わったら、好きになるか嫌
いになるかのどちらか。東北の皆さんはホヤ
が大好きで、（ホヤが好きでなければ、東北
人にあらず。）と。
東京からの出張者が来ると、ホヤをわざと
食べさせます。（うきうきん、食べた後磯の
香りがして、美味ですなあ！）と、極めて
文学的な表現をした人もいました。その箸
は言葉程、進んでいませんでしたね。
ホヤは別名（偕老同穴）と言われ、吾々が
見ているのは実はメスで、オスはその一生を
メスの生殖器の中で過ごすことからだそう
す。その熱愛ぶりから、昔は干したホヤを、
結納の引き出物として使われたとか。

る	る	(か	が	は	の		で	持	な	城	産	で	で		く						1
鮭	鮭	な	ら	、	も	遡	部	す	の	が	県	卵	幼	、	鮭	鮭	第					9
も	は	ん	、	岸	う	上	下	。	動	ら	石	後	生	鮭	の							9
、	、	か	暮	に	遅	を	が		物	も	卷	、	期	の								6
死	ど	悲	れ	打	か	見	出		本	、	外	三	を	遡	上							年
ん	う	し	ゆ	ち	っ	せ	張		能	な	洋	、	過	上								十
だ	す	い	く	上	た	に	で		と	お	か	ご	し	を	見							月
鮭	る	な	川	げ	の	連	盛		は	必	ら	し	ら	ら	れ							一
も	の	あ	面	ら	か	れ	岡		い	死	の	、	れ	る	事							日
、	で	。	を	れ	、	て	に		え	で	長	自	ら	で	す							
捕	す	も	見	て	産	い	来		、	遡	旅	分	る	。								
獲	か	。	下	い	卵	き	た		極	上	で	が	事	。								
す	?	、	ろ	だ	を	ま	の		め	す	、	生	で									
る)	あ	し	け	終	し	で		て	姿	ぼ	ま	す									
事	(の	な	。	え	。	、		感	は	ろ	れ	。									
は	遡	死	が	時	た	期	中		動	、	ぼ	川	。									
条	上	ん	ら	的	鮭	的	津		的	種	ろ	に	。									
例	し	で	、		の		川		な	族	に	。										
で	て	い			死		の		光	維	な											
禁	い	い			体		鮭		景		り											

組	月		な	が	す	ら	な							く	て	チ	て	で	の		せ	
織	で	四	り	、	。	も	り							心	老	ッ	お	し	想	砂	に	
変	も	月	ま	当	桜	、	、							に	い	ク	お	よ	い	浜	な	
更	あ	は	す	地	前	そ	今							残	、	、	ら	う	に	ら	ろ	
や	り	入	。	に	線	こ	ま							る	そ	誰	れ	か	出	に	う	
人	、	社		て	は	は	で							。	し	も	ま	、	が	に	ね	
事	ま	式		は	、	か	雪								、	が	し	遠	、	打	と	
異	た	、		は	日	と	で								そ	が	た	く	支	ち	、	
動	多	入		例	一	な	覆								の	経	。	を	店	寄	そ	
を	く	学		年	日	く	わ								の	験	い	い	長	せ	の	
行	の	式		四	北	木	れ								想	し	つ	つ	の	る	時	
い	会	な		月	上	々	て								い	た	ま	ま	の	波	誓	
ま	社	ど		末	し	の	い								出	青	で	で	に	の	い	
し	が	新		頃	て	息	た								だ	い	小	も	浮	ご	合	
た	一	しい		が	い	吹	周								け	果	袖	じ	かん	と	っ	
。	日	旅		桜	る	が	囲								が	実	海	っ	で	く	っ	
こ	付	立ち		の	よう	聞	の								、	。人	岸	と	きた	、	た	
こ	け	ち		見	で	こ	山								や	は	、	も	た	三	ん	
盛	で	の		ごろ	す	え	肌								が	や	そ	ロ	の	十	だ	
岡	、			と	す	ま	か								し	マ	の	マン	数	年	。	
																			前			

居	込	所	く	て		地	野		く		で	人	ら	に	の	伝		と	で
り	も	が	の	い	遠	で	市	盛	遠	盛	あ	々	せ	泣	単	え		別	も
、	う	あ	せ	ま	野	あ	が	岡	野	岡	あ	の	泣	身	が	当	れ	去	
ほ	と	り	せ	す	物	あ	あ	か	物	か	り	、	き	赴	あ	地	が	る	
こ	し	ま	せ	が	語	り	り	ら	話	ら	、	情	、	任	り	に	あ	人	
ら	て	す	ら	、	第	、	ま	南	五	東	の	の	そ	者	ま	は	、	、	来
の	、	。	ぎ	こ	十	民	す	に	九	約	故	ん	んな	は	、	、	、	、	る
両	失	河	に	れ	話	話	。	七	話	十	郷	で	中	、	ま	ま	、	、	人
側	敗	童	に	に	に	と	。	キ	に	キ	も	遠	在	ず	ず	、	、	、	、
に	し	が	カ	因	、	言	柳	ロ	、	ロ	わ	任	任	身	身	、	、	、	、
河	た	馬	んで	河	れ	田	下	、	下	て	中	随	震	震	、	、	、	、	
童	と	を	瀏	遠	童	い	国	つ	、	つ	ま	所	所	い	い	、	、	、	、
の	い	川	と	野	の	ま	男	た	、	た	わ	で	触	す	す	、	、	、	、
置	う	中	い	市	話	れ	の	処	、	処	て	、	れ	る	る	、	、	、	、
物	う	に	う	常	が	い	遠	に	、	に	い	、	合	よ	よ	、	、	、	、
が	伝	引	伝	堅	書	ま	野	、	、	、	、	、	、	う	う	、	、	、	、
鎮	説	き	が	寺	か	、	物	、	、	、	、	、	、	な	な	、	、	、	、
座	残	ず	残	の	れ	、	語	、	、	、	、	、	、	寒	寒	、	、	、	、
し	っ	り	っ	近		、	の	、	、	、	、	、	、	さ	さ	、	、	、	、
て	て		て			、	舞	、	、	、	、	、	、	の	の	、	、	、	、
						、	台	、	、	、	、	、	、	の	の	、	、	、	、

いるとの事。
観光客で喧騒を極める夏を避け、遊びにきていた家族を連れて、雪深い二月のある日に訪れてみました。
常堅寺の境内を抜け、雪に覆われた農道を踏み締めていくと、カップがあたりました。
確かにそこに、一對のセトモノの河童が鎮座まします。
（ここで記念写真を撮ろう！）と、河童の傍に座ろうとした瞬間、凍結した道に足をとられ、河童と共にステーション・。そして、なんと河童の首が、ぼろんと落ちてしまったのです。家族全員が顔をこわばらせ、周囲を見わたしました。
さらさらと流れるせせらぎの音に混じり、（このまま立ち去っても、誰もわからないよ！）と、悪魔のささやき。やわらかな木漏れ日に、（遠野の河童死す。観光客のいたずらか？）と、岩手日報朝刊の見出しがちらちら。

（ど	した。	の	黙	流	が	ぐ	事	を	か	（	ぼ	の	て	な	ら	も	そ	え	緊
っ	す	顔	っ	れ	・	と	の	開	ら	す	と	管	い	が	れ	の	う	ず	急
ち	す	が	た	る	・	、	顛	け	声	い	ぼ	理	く	ら	た	は	で	、	家
か	る	、	ま	る	）	（	末	た	を	ま	と	者	と	た	ら	し	す	相	族
ら	と	段	ま	る	∥	ど	を	ま	か	せ	戻	と	い	ら	い	よ	か	談	会
き	、	々	ま	る	∥	っ	話	ま	け	ん									

とある日、何気なくテレビのスイッチを入	く	第二十七報				1997年四月一日	てに、河童の首をへしおる。	? 商社マン、河童相手に大乱闘！あげくの果	しにたれこんでやる。単身赴任のストレスか	に報告したところ、へ馬鹿たれ！！フライデー	翌朝、休暇中の不慮の事故として、支店長	。	りだねえくく！と、盛岡に戻ったのでした	く感激し、へ岩手の人は、本当にいい人ばかり	なかつた、おじいさんの対応に、三人はいた	ルだけに、器物損壊に対する一言のとがめも	文化財ではありませんが、観光地のシンボ	眩くように言われたのでした。	ものを、また作ってもらおう。	、壊れた河童は？	・ ・ ・
---------------------	---	-------	--	--	--	-----------	---------------	-----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------	---	---------------------	-----------------------	----------------------	----------------------	---------------------	----------------	----------------	----------	-------

に	た	る	は	出		し	、	す		で	の	を	生	か	十		材	そ	れ
修	よ	の	一	て	い	て	ど	か	レ	は	話	訪	き	げ	三	彼	さ	う	る
理	う	で	対	く	や	、	ど	？	ポ	有	を	れ	出	で	歳	は	れ	で	と
し	に	す	の	る	あ	カ	ど	）	ー	名	喜	と	来	戦	。	、	て	す	、
て	・	。	カ	の	く	ッ	、	と	タ	人	ん	、	た	争	若	阿	い	あ	（
く	・	あ	ッ	か	ま	パ	土	マイ	ー	あ	で	の	と	か	い	部	の	の	お
れ	・	の	パ	な	ず	が	手	クを	が	る	事	事	の	ら	時	与	で	く	く
た	遠	、	、	？	い	、	の	を	、	も	も	。	生	生	に	一	。	く	く
の	野	青	き	と	な	方	映	向	（	わ	聞	ま	き	き	河	さ		く	く
か	市	い	ち	思	小	・	像	け	カ	か	せ	た	て	て	童	ん		く	く
も	観	カ	ん	い	生	・	に	る	ッ	り	て	き	出	戻	を	と		、	あ
し	光	ッ	と	き	が	）	切	と	パ	替	て	、	て	れ	見	い		あ	の
れ	課	パ	鎮	や	壊	カ	り	、	を	わ	く	、	、	た	た	う		の	お
ま	が	も	座	、	した	ッ	ま	、	を	り	れ	、	そ	し	そ	方		お	じ
せ	、	何	し	な	カ	パ	し	、	何	ま	と	、	こ	、	う	で		い	い
ん	き	事	て	ん	ッ	ー	た	、	処	ま	と	、	こ	、	、	、		さ	さ
。	つ	も	お	と	パ	ン	カ	ど	で	した	、	、	こ	、	、		ん	ん	だ
カ	と	な	ら	、	が		ッ	ど	の	。	こ	、	こ	、	、		が	、	！
ッ	す	か	れ	、			パ	ど	で		、	、	、	、			取	、	）
パ	ぐ	つ	れ	に			ー	ど	で		、	、	、	、					）

で、	1	あ	思	も	く		顔	か	野	岩	こ	。	わ	も	や		を	の
足	9	と	い	な	く	ラ	を	ら	は	手	と	他	け	各	沼	と	な	そ
か	9	が	ま	く	、	ッ	し	、	盆	県	に	県	か	地	・	で	な	の
け	4	き	し	、	、	パ	て	、	地	だ	な	の	、	に	淵	、	で	後
五	年		た	岩	、	ッ	い	、	で	け	な	カ	岩	が	が	お	が	
年	の		。	手	、	パ	る	、	夏	の	な	ッ	手	た	ろ	ろ	気	
盛	五			県	ま	、	の	、	は	よ	な	パ	の	く	、	し	に	
岡	月			の	さ	カ	だ	酒	暑	う	な	伝	河	さ	た	な		
支	か			特	か	ッ	、	を	く	で	な	説	童	ん	一	っ		
店	ら			異	河	パ	と	飲	、	、	な	に	の	あ	幕	て		
に	1			性	童	、	と	み	冬	ど	な	お	顔	り	で	い		
在	9			と	が	、	、	、	は	う	い	い	の	、	し	た		
勤	9			し	酒	キ	あ	そ	予	や	て	は	色	こ	た	。		
し	9			て	を	、	り	れ	想	ら	は	、	は	ろ	。			
ま	年			面	飲	、	ま	故	以	赤	、	顔	が	が				
し	の			白	む	、	し	に	上	い	顔	は	、	、				
た	二			い	わ	、	た	寒	に	、	は	青	い	い				
。	月			話	け	、	。	い	事	、	は	青	い	う				
こ	ま			だ	で	ラ		い	。	遠	は	青	い	う				
				と														

の拙文は、その間弊社の東北支社（仙台）と
東京の本社宛に送った月報から、抜粋したも
のです。
業務月報とは、その月の営業活動や結果に
ついて報告するものです。そんなものはこ
の情報化時代、知りたければパソコンを開き
、データベースとして、いつでも誰でも見れ
るわけです。
そのような無味乾燥たる月報を、元来がひ
ねくれものの小生は、作成するつもりはさら
さもなく、岩手県の風土・文化・情報につい
て、日々の生活で感じた事を含めて、毎月発
信しようと思いました。
案の定、これは公文か私文かの社内論議を
呼び、結局小生の私文としての位置づけで、
継続を認められませんでした。何も、勤務時間内に
書いているわけでもなく、読みたい人がいれ
ば読めばいいわけであって、官僚的な見解に
当時驚いたものでした。

岩手県の方には大変失礼とは思いますが、

小生の小学生時代の教科書では、岩手県は日本
のチベットとも紹介されており、東北新
幹線と東北自動車道の整備や、テレビやイン
ターネットなどの普及を通じて、その存在が
身近になったと言っても、過言ではありませ
ん。
東京生まれの東京育ちである小生も、盛岡
への転勤まで岩手県に足を入れたことがなく
、当然知識も情報もないままの赴任でした。
ところが、足かけ五年の滞在を通じて、岩手
県のよさ、すなわち、いまだ残されている豊
かな自然と、日本では今や死語となりつつあ
る人情味に行き先々で触れ、岩手県のそして
東北のファンとなつてしまいました。社内でも、
（こんないいところはない！）と積極的
にPRに努めた結果、（そんなに気にいった
のなら、次は福島県郡山だ！）と。そしてそ
の後仙台、また郡山に戻りました。結局東北
在勤が、いつのまにか通算十七年の、長きに
わたつてしまいました。

本年度五月末をもって、みちのく一人旅に
終止符を打ち、いよいよ東京に戻ることとな
りました。その意味から、小生の第二の故郷
となった、岩手県で過ごした数々の思い出を
、ここで改めて振り返り、また出会った総て
の方々に、感謝の気持ちを心から捧げるもの
です。

— 完 —